

## 「彦火々出見尊絵巻」 図像私註(二)

—幼児・低学年児童の古典学習材として再構成するために—

古 田 雅 憲

The Visual Thinking Strategies for "The Emaki  
of UMISACHI & YAMASACHI"(2)

Masanori Furuta

### 【はじめに】

幼児・低学年児童の古典学習のために、明通寺蔵『彦火々出見尊絵巻』を「読み聞かせ」学習材として再構成する——その目論見は前稿(後掲・参考文献10)のままに、今回は巻二部分を取りあげる。

その趣意は前稿に詳しく述べたとおり、次期小学校学習指導要領に言う「伝統的な言語文化に関する事項」にかかる実践的なプログラムを開発することにある。それに際して特に意を注いだのは、「伝え合う力を高める」という国語科の大目標に従う古典教室として、児童相互の「交流」を活性化する学習活動となるように、という点である。

具体的には、「海幸彦・山幸彦」の神話に題材を得た古典絵画として質・量ともに秀でた明通寺蔵『彦火々出見尊絵巻』を取り上げ、まず古典絵画をよく「見る」ことを通じて、児童相互の「話す・聞く活動／交流」を活性化しようとする。次に、発達段階に応じてリライトした本文によって「内容の大体を知り」、その上で「音読すること」を楽しんだり、「国の始まりや形成過程、人の生き方や自然などについての古代からの人々のものの見方や考え方」について話題にしようとするのである。

ともあれ、そのようなことについては前稿冒頭に縷々述べたことでもあり、

今ここに繰り返さない。必要に応じて参照されたい。以下、さっそく巻二・各場面について図像私註を示し、併せて詞書を踏まえた読み解きを提案したい。

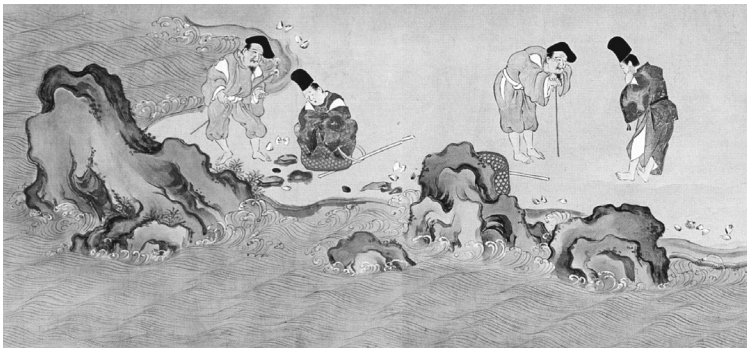
### 【第八場面（下掲・図版①）／巻二・第二紙の読み解き】

巻頭詞書（第一紙）に続いて第八場面となる。前場面（巻一末尾・第六紙）と同じ海浜が舞台である。

画面右半、やはり前場面と同じ二人が向かい合う。

まず右方が弟宮である。狩衣に奴袴を着し、頭には立烏帽子を着ける。袴の裾はたくし上げられている。すべて前場面同様である。彼は、強いて借り受けた兄尊の針を失い、それを返すすべも考えあぐねて、海浜を永く彷徨したのである。そこに翁が唐突に現れ出でた——それが前場面であった。

この画面でもなお弟宮は良策を考えつかないでいるらしい。彼は左手を頬にあて、素足で「もじもじしている」ように見える。いかにも「いまだ悩みは解決しない」という風である。その点、「(いかな) るひとの、かくものおもひすかたにては、ありきたまふそと、とひければ、みこ、ことのありさまをかたる」と言う巻頭詞書によく照応している。ちなみに「頬に手をあてる」の仕草は、古絵巻類には、困惑懊悩する人物の様としてよく見出される。



<図版①/参考文献(5)による。以下同。>

左方が謎の翁である。前場面同様、浅黄色の直垂を着し、頭には萎烏帽子を着ける。前場面では簀を先に結わえた棒を左肩に担いでいたが、ここではそれ

を岩陰に下ろしている。両手で竹杖に凭れかかって、弟宮となにかしら言葉を交わす風である。やはり巻頭詞書によく照応している。



画面左半には同じ二人がまた描かれる——「異時同図」である。

まず左方の翁は杖を左脇に手挟み、右手で簀を軽く指さしつつ、左掌を軽く差し出している。いかにも「これへどうぞ」と弟宮を招く風である。この点、「いとなさげなきあにのみことにこそあなれ。おのれもとめてたてまつらむ。このあしかにのりて、めをひさきて、しはしいましかれといふ」と言う詞書によく照応している。

右方の弟宮は簀に尻を押し込むようにしている。簀の口がぎしぎしと大きく広がっている様子などユーモラスでさえある。翁の言葉に従って「そのままに、あしかにのりて、めをひさきてゐたり」（詞書）というのである。が、いまだ腕組みをし、右手も頬にあてているから、翁の言葉に従いつつもなお半信半疑の風である。



以上のような画註と詞書を踏まえて、次のように再構成してみた。

翁の発話について、「…じゃな」、「ちと」、「わし」などの表現をあえて用いた。また翁について山幸彦が「不思議な神様」と感じた旨の一文も付してみた。上述のように、図像からは明らかに翁が低位であるが、「寝し姿の放浪者が神仏の化身であるかもしれない」と往時の読者が等しく予感したところを取り込みたいとの趣旨である。この点、古事記では翁は「塩椎神」と言うから必ずしも無用の企みでもあるまい。

「どういう わけで、そんなに かなしそうに しておいでじゃな？」

おじいさんに たずねられるままに、やまさちびこは わけを はなしました。だって、このおじいさんが、なんだか ふしぎな かみさまに おもわれたからです。

「うむうむ、ちと きびしい あにうえじゃのう。よろしい、わしが ちからに なりましょう。この かごに のって、めを しっかりと じるんじゃ

よ。」

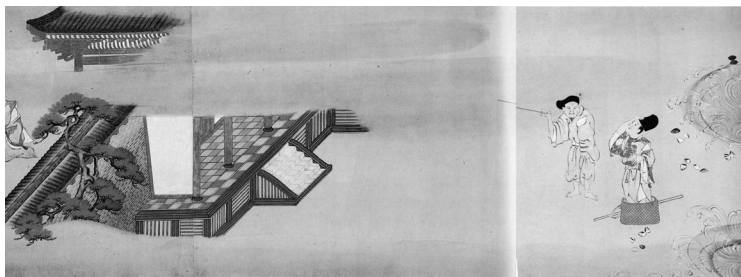
やまさちひこは、いわれるままに、ギシギシ おしりをおしこみました。  
ほんとに だいじょうぶかなあ？

### 【第九場面（下掲・図版②）／巻二・第四紙～第五紙（右端）の読み解き】

第三紙・詞書を挿んで第九場面となる。前場面までと同様の海浜であるが、実はここは異界である。前場面の穏やかな水面とは対照的に、そこに打ち寄せらる波は激しく白く砕けて逆巻き、いかにも「先ほどまでとは違う場所」という風である。

その海浜には同じ二人がまた描かれる。

まず左方の翁は、杖を右手に持って画面左方を指し示し、いかにも弟宮に向かって「さあ、そちらへどうぞ」と誘う風である。この点、「あしかもたけてゆくなりとおもふほとに、しはしはかりありて、うちおきて、いまはおとろけとおきなのおつれは」と言う詞書によく照応している。



<図版②>

さて右方の弟宮は、それに導かれるように簀から立ち上がり、画面左方を見遣っている。右手を額に翳し、左手はしっかりと掌を開いている。

ちなみに「額に手を翳す」の仕草は、「第六場面／巻一第五紙（左半）」にも見出された。そこ（前稿）でも触れたことだが、その仕草は、古絵巻類には、火事や喧嘩等の闘擾を、野次馬よろしく見物しに急ぐ人物の様としてよく見出される。この場面でも、それは、弟宮の見つめる先に、火事喧嘩に匹敵するよ

うな興奮が待ち受けていることを暗示するものと解されよう。また「しっかりと掌を開く」の仕草は、やはり「第六場面」に見出された「肩肘を張る」と同様に、格闘や闘争に興奮し熱中している人物の様としてよく見出される。これもまた、この場面における弟宮の心情をよく示すものと解されよう。

それらの点、「いまはおとろけとおきなのおつれは、めをみあけてみれば、えもいはす、七寶をもちてかされるところの、るりはりをもちてつくりかさり、てりかかやきて、めもみあはせず」という詞書によく照応している。

弟宮は、翁の言葉に導かれるままに至った「異界」の、瑠璃玻璃七宝で目にも鮮やかに造り成した荘厳に、すっかり興奮し動揺しているのである。



その具体的な図像が画面左半（第五紙右端）である。そこには外楼門の屋根が霞の中に浮かぶ。高楼である。楼門の上下部を霞で分断して描くのが、「高さ」を強調する表現であることは言うまでもない。その屋根は総瓦葺き。丹塗り材を巧みに組み上げた構造とともに実にしっかりとした描出を得て、その威容を伝えるべく凝らされた画者の筆力がよくうかがわれる。

霞の下に見える楼門下部の構造は多彩な色の組み合わせが美しい。朱塗りの柱は黒々とした礎石を介して基壇上に屹立し、その周囲の石畳は、瑠璃玻璃が格子状に敷き詰められている。その瑠璃玻璃は基壇側面や階までも荘厳して、踏み段の白石を浮かび上がらせている。

門側方に目を転じれば、まず純白も鮮やかな漆喰壁と堅牢な造作らしい築地塀が続いている。塀上に奢られる飾り屋根さえ、瑠璃玻璃で荘厳された瓦葺きである。松樹の美麗も言わずもがな、要するに、画者が筆力を凝らして画面に立ち向かったことは明白である。

この点、「えもいはす、七寶をもちてかされるところの、るりはりをもちてつくりかさり、てりかかやきて、めもみあはせず」という詞書と相応する。



以上のような画註と詞書を踏まえて、次のように再構成してみた。

この場所をあえて「竜宮城」と称したのは、それが「浦島」の昔話を通じて、幼児・児童にもなじみ深いものだからである。末尾に設けたくはなしあってみ

よう>の項目も、やはりそれに関連する。ともに海宮訪問譚の主人公である山幸彦と浦島との差異について、子供たちなりの活発な交流を期待したい。

しばらくして、のっていた かごが どこかに ついたかと おもったとき、おじいさんが いいました。

「さあ、めを あけて よろしいぞよ。」

めを みひらいた やまさちひこは、おじいさんが つえで さす ほうをみて、あっと こえを あげました。

そこは りゅうぐうじょうでした。たくさんの ほうせきや たからもので かざられて、まぶしいくらい ひかっています。

<はなしあってみよう>

※むかし むかし、りゅうぐうじょうに いった うらしまたろうと いうひとの おはなしを していますか？

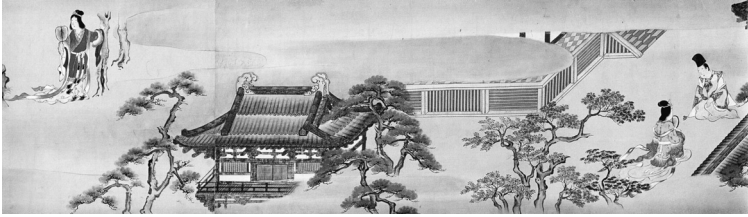
—たろうが どうやって りゅうぐうじょうに いったか していますか？

—たろうが ふるさとに かえって きた とき、そこは いったい どうなっ いたでしょうか？

### 【第十場面（下掲・図版③）／巻二・第五紙～第六紙の読み解き】

この場面は、それじたいとても美しいものではあるが、必ずしもその全体が、幼児・児童のための「読み聞かせ古典絵本」に不可欠というものでもない。ただ、弟宮が自ら名乗りをする場面だけに省くわけにもいきまい。

画面全体は、海宮の外楼門とそれに続く楼閣二棟を舞台とする長い一葉である。そのなかに、門の傍らで向かい合う男女と樹木にもたれかかる女性が描かれている。



&lt;図版③&gt;

まず画面右半，外楼門の内側に一組の男女が対座している。

右方男性は弟宮，先ほどまでと同様の狩衣姿である。

左方は，海宮の女官と思しき女性の後姿である。髪上げをして釵子を飾り，領巾裙帯の唐装束を着している。海宮に迷い込んだ弟宮に事の次第を問いかけているらしく，男性との対面を憚ってか，手にした唐扇で口元を覆い隠している。

この点，「かとのわきに，たまのをんなるたり。なんちはなにひとそ。このくにのひとにもあらぬひとの，かくにはかにいてきたるはといふ。みこ，こたへていわく，われはあしはらやひのもとのみこなりといひて，つりはりのことのありさまを，はしめよりかたる」と言う詞書とよく照応している。



次いで画面は海宮内の楼閣を描いていく。霞上に浮かぶ入母屋造の大屋根は，紺瑠璃・緑瑠璃の瓦で葺かれ，金鷄尾さえも奢られて，先の楼門に増して豪華である。松樹の緑，楓樹の朱も美しい。霞の中に部分の美麗を垣間見せつつ，その向こうにある全容の豪華を想像させるという表現は，むろん絵巻通例の方法である。

画面左端（第六紙右半）に再び逆巻く波濤が描かれて，ここまでが一葉と見える。全体，第四紙左半～第六紙右半に至るかなり横長のものである。そのなかでも，左端（第六紙）に描き添えられている一女性は唐突な印象である。色鮮やかな唐装束を身にまとい，右手の唐扇を軽く口元に翳し，左手で樹にもたれ掛かる風である。その図像の含意は，あるいは次の場面へ向かった弟宮の後ろ姿を見送るかとも見えるが，あまり明白ではない。

「樹下の女」と言えば、日本書紀等に見える名場面を思い出すこともできる。すなわち、「海宮に入った弟宮が樹上に身を隠していたところ、樹下の井水に映り込んだ影によって、水を汲みに来た女たちに見出された」との神話的な一条である。が、本絵巻はその文脈を欠いているので、この図像をそれと結びつけることは難しいだろう。



以上のような画註と詞書を踏まえて、次のように再構成してみた。

やまさちびこは、りゅうぐうじょうの なかに はいって きました。  
 もんの なかに、きれいな おんなの ひとが いました。  
 「あなたは どなた？ この くにの ひとでは ないようだけど。」  
 そう たずねられた やまさちびこは こたえました。  
 「わたしは、うつくしい くさきが しげる ひかりのくにから やってき  
 ました。その くにの なは にほん、わたしは その くにの わかもの  
 です。」

### 【第十一場面（図版なし）／巻二・第七紙左半～第八紙右半の読み解き】

第六紙（左半）からの詞書を挿んで第十一場面となる。

この場面も、それじたいとても美しいものではあるが、物語の進展に不可欠というものでもないので、幼児・児童のための「読み聞かせ古典絵本」の一頁からは省いてよい。

画面全体は、海宮の中門とその外側に広がる樹木群を舞台とする一葉である。そのなかに、門前に進む男性と彼を迎える女性が描かれている。

まず画面右方には、門前の松樹・楓樹等の樹木群が、立派な石の造作とともに描かれている。樹木の合間には、やや唐突ながら、逆巻く波濤が見え隠れして、ここが他ならぬ「海宮」であることを強調する。

それに続いて中門が霞の中に現れる。外楼門や先の楼閣群に比べると、かなり簡素な造作ではあるが、総瓦葺きの屋根、それを支える朱塗りの部材や柱、白く輝く漆喰壁、回廊の飾り屋根の緑瑠璃、基壇に敷き詰められた瑠璃玻璃等



の荘厳は、やはり豪華である。そこに凝らされた画者の筆力がよくうかがわれるところである。

この点、「たまのをんなきゝてかへりいりぬ。いてゝ、かとのうちにいるべきよしをいふ。そのまゝにうちにいりてみれば、また、中門あり。おなしくりをもちてかさされり。かゝやきてること、はしめよりも十倍まさされり。おなしくまた、かとのわきにたまのをんなあり。そのをんなも又、はしめのためにはまさされり。おなしやうにとへは、はしめのことくにこたふ。をんな、うちにいるへきよしをいふ」と言う詞書によく照応している。



さて画面では、門前に一組の男女が向き合っている。

右方男性は弟宮、先ほどまでと同様の狩衣姿である。

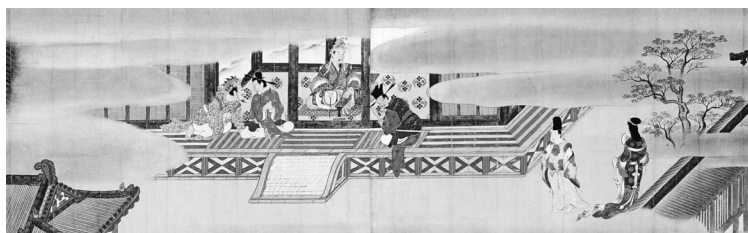
左方は、海宮の女官である。髪を上げて釵子を飾り、領巾裙帯の唐装束を着して、唐扇を持つという出で立ちはこれまでの女官たちと同様である。彼女は、左袖で口元を覆い隠し、右手の唐扇で画面左方を指し示している。海宮内を進み来た弟宮に何かしら声をかけつつ、さらなる奥へと誘う風である。

この点、「おなしやうにとへは、はしめのことくにこたふ。をんな、うちにいるへきよしをいふ」と言う詞書によく照応している。

### 【第十二場面（下掲・図版④）／巻二・第八紙左半～第九紙の読み解き】

前場面にすぐ続いて第十二場面となる。両画面はいわゆる「異時同図」である。画面右方に一組の男女が描かれる。弟宮と彼を見送る女官である。その衣装等はこれまで同様である。

画面左方、いよいよ海宮の主殿が霞の中に浮かび上がる。その造作は、まず側面を紺瑠璃・緑瑠璃で荘厳した基壇の上に、丹塗りの部材で柱・長押を組み上げたものである。室内には花紋の氈が敷き詰められ、室外の簀子縁にも紺瑠璃・緑瑠璃の装飾敷物が巡らされている。全体、とても華麗な意匠と言って良いだろう。また調度品の設えも、山水を描いた障子、錦の褥、唐木の脇息、掛け渡した青簾など様々に豊かである。



<図版④/場面全景>



さて、その主殿正面、石階の奥に座るのが龍王である（下掲・図版⑤）。袞龍の御衣・繡裳を身に着け、頭には金色鯰形の冠を着している。いかにも海宮の主に相応しい威儀である。

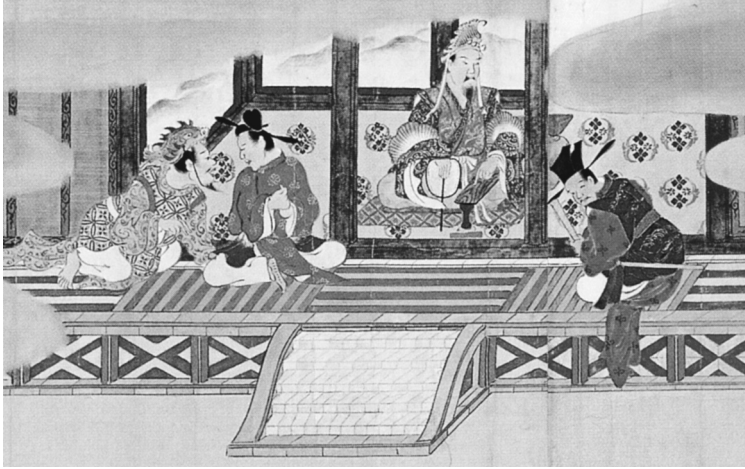
この点、「なかに、しうとおほしきひとゐたり。おろそかに、いつくしきこと、いはむかたなし」と言う詞書によく照応している。

彼の視線は、今しも主殿前に進み出てきた弟宮に向けられている。その右手は唐扇を逆さに持ち、コツコツと軸を床に打ち鳴らす風であり、また脇息に乗せられた左手は、まさに「人を指差す」仕草を取ろうとする風である。その「指差す」仕草は、強い調子で詰問したり、相手を論難したりする人物の様として古絵巻等によく見出されるものである。詞書にそれと書かれないが、不審者の闖入を目にした龍王の心中が暗示された図像表現と見て良いだろう。

その龍王の左右に三人の人物が描かれる。いずれも簀子縁にあって、いかにも臣下の体である。なかでも褥を用いている二人は左右大臣といったところだろう。それぞれ目にも鮮やかな衣装を身に着け、頭には唐風の冠を付けて威儀を正している。

まず画面右方の大臣は両手で笏を捧げ持ったまま、龍王の視線を追うかのように大きく振り返る。また左方の大臣は駆け寄ってきた人物の方を振り返る。頭に魚形の冠を着けたその人物は、女官經由で上がってきた情報——「あしはらやひのものとのみこ」の来臨を慌てて奏上しに来たのだろう。王の御前を慮って平伏しながらも、なお慌てずにはおられないという風に、前のめりに膝走りて参上したという様である。大臣に呼びかけるかのような右手の表情もまたそ

れらしい。



<図版⑤/場面拡大>

要するにこの場面、威儀堂々とした海宮の様子を描き出しつつ、同時に、不意の事態の緊迫感をも十分に描き出した一葉である。画面左方の大臣の手から、大切な「笏」をうっかり描き落とした（彼の大臣の複雑に組まれた両手は、もう一方の大臣同様に、明らかに「笏」を持つはずだった）のだとしても、画者の筆力の充実をよくうかがわせるところである。



以上のような画註と詞書を踏まえて、次のように再構成してみた。

やまさちびこは とうとう りゅうぐうじょうの いちばん おくに たどり つきました。

そこは、この ひろい うみを しはいしている りゅうおうさまの へや でした。

りゅうおうさまは、やまさちびこを じっと みつめています。

だいじんたちも ふりかえて みています。

さあ、これから どうなるのでしょうか？

※以下、次稿に続く。

## 参考文献

- (1) 稲本万里子 (2003) 「描かれた出産—『彦火々出見尊絵巻』の制作意図を読み解く」  
(服藤早苗, 小嶋菜温子 (編) 『生育儀礼の歴史と文化—子どもとジェンダー』 森話社)
- (2) 稲本万里子 (2007) 「描かれた結婚—源氏物語絵巻 彦火々出見尊絵巻を中心に」  
(小嶋菜温子 (編) 『平安文学と隣接諸学 3 王朝文学と通過儀礼』 竹林舎)
- (3) 大林三千代 (1975) 「『すみよしえんき』における彦火々出見尊の説話について」  
(『国文研究』 4)
- (4) 小松茂美 (1979) 『日本絵巻大成 (22) 彦火々出見尊絵巻・浦島明神縁起』 (中央公論新社)
- (5) 小松茂美 (1992) 『続日本の絵巻 (19) 彦火々出見尊絵巻 浦島明神縁起』 (中央公論新社)
- (6) 高畑勲 (1999) 『十二世紀のアニメーション—国宝絵巻物に見る映画的・アニメ的なるもの—』 (徳間書店)
- (7) 永井久美子 (2001) 「弟の王権—『彦火々出見尊絵巻』制作背景論おぼえがき」  
(『比較文学・文化論集』 18)
- (8) 中根千絵 (2004) 「院政期文学に現れる老賢者」 (『アジア遊学』 68)
- (9) 西本鶏介 (2004) 『海幸彦山幸彦 日本の物語絵本』 (ポプラ社, 藤川秀之絵)
- (10) 古田雅憲 (2009) 「彦火々出見尊絵巻・図像私註 (一) — 幼児・低学年児童の古典学習材として再構成するために—」 (『西南学院大学人間科学論集』 5 巻 1 号)
- (11) 山内英男 (1974) 「『彦火々出見尊絵』研究序説」 (『東洋大学大学院紀要』 10)

※本稿では『彦火々出見尊絵巻』の図像理解に直結するものだけに限った。論旨全体に関するものは前稿 (参考文献 10) に掲げたので参照されたい。